

季刊 | 145. 2013

国立民族学博物館 協力  
2013年7月25日発行 第37巻第3号  
通巻145号 ISSN 0389-0333

# 民族学



特集  
水を考える

# グローバル化と小さな村

## 海を越えるためのリアリティ

竹川 大介 TAKEKAWA Daisuke  
北九州市立大学教授

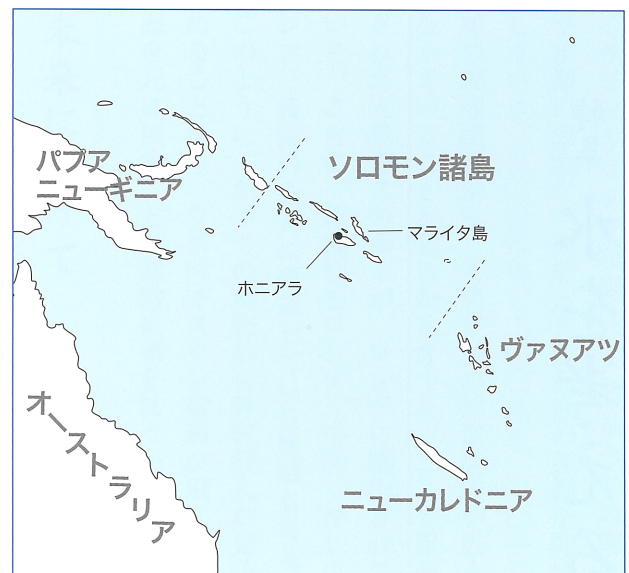
### 船旅の国

ソロモン諸島は海でつながった船旅の国である。太平洋の他の地域でよく見かける軽飛行機のかわりに、今でも人びとは船舶を利用して盛んに移動している。

首都ホニアラの海側に港が隣接し、船が着くたびに積み荷の上げ下ろしではしげはごった返す。山積みになった段ボール箱のなかには米や缶詰などの日用品がぎっしりと詰まり、筋肉質の屈強な男たちが転がすのはドラム缶にはいつた燃料だ。時には街で亡くなった人を納めた棺もともに海を渡る。こうした貨物と引き替えに島から送られてくるのは、芋や野菜、ココヤシ油を採るためのコプラ、そして生きた鶏や豚たちである。

私がこれから乗るのは南マライタ行きの船である。六年ぶりのソロモン滞在、七回目の里帰りとなる。

一時期は日本製の中古フェリーが使われていたが、二〇〇〇年代当初におきた内戦の際に、その船は民兵に乗っ取られ、火をかけられ、今は陸に座礁している。内戦以降、ソロモン政府の財政は悪化し、南マライタの定期航路を再建することが困難になった。そのため地域の村民たちが共同で出資して、船齢五〇年をこえる木造のミッション船を教会から買い取り、週に二便



の運行で村々をまわる航路を再開した。

「スモール・マラ」という名がつけられたその小さな木造船は、甲板までぎっしりと人びとで埋まっており、オイルと腐敗臭が入り混じった餿すえたような匂いが船内に漂っていた。その光景は、はじめて私がこの国にきた二〇年前そのもので、まるでタイムスリップしたような気持ちになった。

目的の村までは二四時間。食事と水を持ち込み乗船する。

マライタ島に住む「ラウ」の人びとは、別名



久しぶりに会った村の友人一家。新しく生まれた三女に、若くして亡くなった長女と同じ名前をつけていた。  
73 ページに載せた昔の写真にうつる長女と面影がよく似ている



内乱で火をかけられ廃船になった日本製の中古フェリー



出航前にごった返す首都ホニアラのはしけ



積み荷と乗客であふれる船の中



南マライタを周航する木造船スモール・マラ



「海の民 (wane asij)」とよばれている。彼らの伝説によると、海に向こうからやってきた肌の色が明るい謎の娘が、小さな魚と、大きな魚と、イルカを岸によびよせる不思議な三つの石を伝え、以来彼らは海に住む民となったという。

リーフの上やラグーンのなかに石を積んで建設される独特な人工島に暮らす彼らは、マライタ島の沿岸部に住んでいたメラネシア系の人びとが、数百年前に周辺のオントンジャワ環礁などに移住してきたポリネシア起源の人びとの影響を受け、海浜生活に適応していったと考えられている。

南緯三度のこの地域には、ほとんど台風が来ない。海上の人工島での暮らしに必要な水や薪はカヌーで毎日運搬される。人工島には蚊も少なく、この地域で猖獗をきわめるマライアから難を逃れることができるため、ソロモン諸島のなかでもとくに人口増加率が高い地域となっている。

不思議な三つの石は今でも魚をよぶ力をもっている。ラウの人びとはマライタ島の各地に分村を作り、優れた漁撈民として敬意を払われている。彼らは海での生活に特化し、海産資源を周辺の焼き畑農耕民がつくるバナナや根菜類と交換しながら日々の暮らしに必要な食糧を得ている。



はるか海の沖合から水面下で打ち鳴らす石の音だけを武器に、体を張ってイルカを追い込む高度な集団漁

## イルカ漁の村

この木造船「スモール・マラ」が向かっている南マライタのイルカ漁の村も、そうしたラウの人びとの分村のひとつである。

その村を知ったのは一九九〇年、はじめてソロモンを訪ねたときのことである。伝統的なイルカ漁の技術を、もつともよく守り伝えている村が南マライタにあるらしいという噂を首都で聞いた。肉を食糧として利用するだけでなく、イルカの歯はソロモン諸島一帯で貴重な財貨として利用されている。その財貨の供給のために

イルカを狩る特殊な技術が南マライタに残っているというのだ。

この話に興味を持った私は、詳細を尋ね歩いたが、当時の首都の人たちは村の名前すら知らなかった。港で南マライタ行き船を探せば、なにかわかるかもしれないと教えられ、ようやく一人の村出身者を探し当てた。折り返し村に戻るといふ船にとびのり、今回と同じように一昼夜かけて訪ねたのが最初の船旅だった。

右も左もわからない駆け出しの大学院生ころである。日本から訪ねて来た私を村の人びとはおもしろがり、とてもかわいがってくれた。私はチーフの息子として迎え入れられ、部屋を与えられた。その後、九〇年代は毎年のようにこの村を訪ねた。一五〇人ほどいる村人の名前や親族関係はもとより、一人ひとりの性格までお互いに理解しあっている、そんな共同体の経験はとても居心地がよかった。私はもう一つのふるさとをもった気持ちだった。

一九九七年に父親代わりのチーフが亡くなり、それ以来、少しずつ私の立ち位置も変わっていった。それまでは、村の子どもとしていた家でも自由に出入りしつづけるようになった。やがて複雑な村の人間関係に組み込まれるようになっていった。ちょうど町の学校に進学した勉強のできる子どものように、私も村の生活や将来に対する責任が期待されるように

なった。そして、いつのまにか村の有力メンバーの一人として発言がもたえられるようになった。

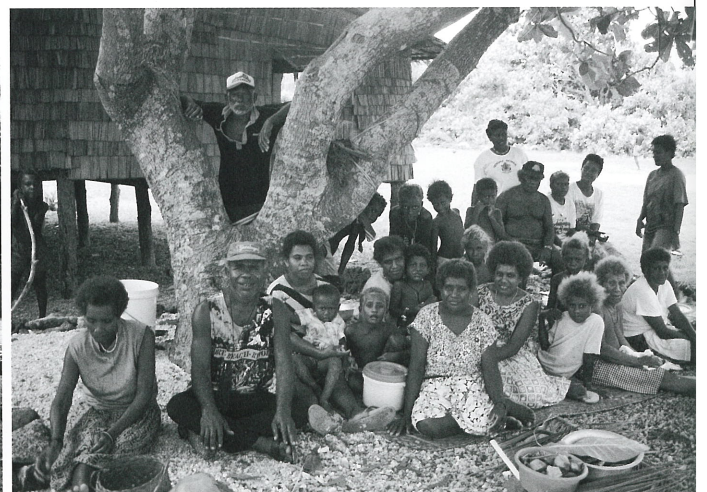
今回も村に向かう前に、首都に住む村の親戚の家に泊まり近況を語り明かした。食事をとりながら互いに元気であることをよろこびあい、村人の消息や村で起きた事件をひとつと聞き、不在の時間を埋めていく。昔話はそのしかたし、びつくりするような人の噂も飛びだした。久しぶりの私の訪問を、いつもとおなじように歓迎してくれた友人たちは相応に歳をとり、年寄りの何人かは鬼籍にはいり、子どもたちはいつの間にか成人し結婚していた。

しかし、最後はみな一様に口を濁した。「村はもう昔の村ではない。おまえも驚くと思う。村に行ったらわかる」

## 海に沈んでいく村

この時期、貿易風の影響で東海岸の海は大時化となる。人間と貨物を満載した小さな木造船は、そそり立つ壁のような波に翻弄されながらようやくやくのことで村までたどり着いた。船酔いで朦朧とした視野のなかに、なつかしい風景が飛び込んでくる。リーフの上の砂州に細長くならぶ家々。海の上に蜃気楼のように浮かぶ小さな村のたたずまい。

しかし、かつて私が住んでいた家はもうそこ



1990年 はじめて島を訪れた年。私が住んでいた家の前の木陰に集まる家族。70ページに同じ場所の現在の風景がうつっている。



2000年当時、健在だった教会の前にあつまる村人全員

かつて私が住んだ家のあった場所は海になっている。  
中央奥の立ち枯れた木が、69ページの人びとの木陰を  
つくっていた木である



海がすぐ横まで迫り半分水没した教会。  
かつてここは、村の中心部だった





2000年の大潮の日の満潮時に、海が村のなかに浸入してきた



到着したスモール・マラを迎える村の人びと



社会の階層化が進んでいないソロモン諸島ではビックマン制度といい、チーフが村の世話役をつとめる。脳溢血で倒れたチーフ(中央)にかわり、その甥が世話役の権限を引き継いだ

にはなかった。村の真ん中にあった教会も、海岸べりに半分埋もれていた。村は海に沈みかけしており、多くの家族は対岸のマライタ本島に移ってしまった。

二〇〇〇年の一月に村を訪ねたとき、大潮の日の満潮時にこれまで海水がはいらなかった場所まで浸水し、家々の台所が水没するという事件が起きた。それまでもじわじわと海面は上昇しており、人びとは島が沈んでいるのではないかと心配していたが、じつはそうではなかった。海が上がりつづけていたのだ。

海面はその後わずか数年間のうちに一気に三〇センチほど上昇した。ちょうど地球温暖化

による海面上昇が太平洋各地でおこり、世界的な社会問題になりはじめた頃だった。砂を積んで土地を高くするだけではとても対応できない。海面が上昇すると、リーフを乗り越えて外洋の大波がラグーンのなかに頻繁にはいり込んできくる。海面すれすれにつくられた人工島はひとたまりもない。

今では村の人のだれもが、海面上昇を引き起こした原因が、大国で暮らしている人びとのエネルギー消費であることを知っている。しかしたとえそれを知ったとしても、村人にはどうすることもできない。

変わったのは風景だけではなかった。

## 札束に傷つけられた誇り

島にはまだ何件かの家が残っていた。しかし本来ならばすぐに迎えてくれるはずの今のチーフは浜まで来ていなかった。町にいううちにそれとなく聞かされていたのだが、私が所属しているチーフの氏族に深刻な内紛が起きていた。

前のチーフが亡くなったあと、まだ子どもたちが小さかったため、チーフの弟が地位を継いでいた。ところが数年後に彼も脳溢血のういっけつで倒れてしまう。幸い命は取り留めたものの、言葉を失い、体に麻痺まひが残った。

島が海に沈みはじめ、村が存亡の危機に陥って



定期船は村々にたちよりながら巡回する。  
カヌーに乗った村人たちが集まってくる

いる最中の出来事である。急場をしのぐため、存命であった先代の弟である叔父と、その若い息子である従兄弟が後見人となり、従兄弟が事実上のチーフ代理として村の世話役の権限を引き受けていた。その彼がトラブルを起こしていたのだ。

原因は、イルカ漁だった。

二〇一〇年四月、村の上空に突然ヘリコプターが飛んできた。乗っていたのはアメリカの自然保護団体の活動家たち六名だった。かれらは若い従兄弟のチーフを説得し、ある交渉を進めようとしていた。ヘリコプターをチャーターし島に直接のりこむあたりが徹底している。首都には高等教育を受け国家公務員や会社運営をしている村出身の知識人たちが住んでいるが、海外事情がわかる彼らは、この訪問についても知らされていなかった。

村人たちは、いきなりやってきた白人に、イルカ漁が世界じゅうから非難を浴びていると聞かされ、驚くと同時に恐れを抱いた。若いチーフ代理が合意していたこともあり、混乱した状態であわてて覚え書きに署名をしてしまった。

覚え書きの内容は以下の通りだった。二年間イルカ漁をおこなわない代わりに、自然保護団体から補償金を受け取る。交わされた書面には記載されていないが、補償金として提示された金額は二四〇万ソロモンドル、日本円で

二四〇〇万円だった。むろん村人のだれも見たこともないような大金である。それを近隣の村とあわせて一〇〇家族ほどで分けると、一家あたり二四万円ほど、一カ月で約一百万円の計算になる。

みかたによってはまるで札束でほおを叩くような横暴なやり方だが、村人にイルカを保護してもらおうという名目にすりかえ、対外的に「生態系サービスに対する支払い」という大義名分をたてていた。これを実績にすればさらに寄付金も集まる。活動家にとってはすべては正義のためであり、後ろめたさや罪悪感はほとんどないのだろう。

村人たちは契約を守り、二〇一一年と二〇一二年の二年間の漁期のあいだ、イルカ漁に出ることはなかった。自然保護団体は、「四五〇年来続くイルカ漁をストップさせた」と自分たちの成果をホームページに書き込み、「この手法で次は日本を止めさせる」と大きく宣伝していた。

しかし、村のなかでチーフ代理は孤立していった。自然保護団体からの補償金の支払いも滞っていた。最終的に七〇万ソロモンドルは支払われたというが、村人たちは納得していなかった。頭ごなしに交渉を進められた首都の知識人たちも、村人たちの無知につけ込むようなやり方に怒っていた。





67ページと同じ友人一家の1993年の時の写真。中央の長男はすでに独り立ちし、母に抱かれている長女は若くして病気で亡くなった

儀礼や婚姻のために必要な交換財であるイルカの歯は高騰し、いつもの年ならば、地域一帯に流通するイルカの肉の恩恵を受けるはずの周辺の村々にも、その年の季節の味は届けられなかった。

なによりも、村人たちの誇りが傷つけられていた。世界じゅうのほかにだれもまねできない勇壮なイルカ漁。小さな丸木舟のカヌーをあやつり、はるか海の沖合から水面下で打ち鳴らす石の音だけを武器に、体を張ってイルカを追い込む高度な集団漁の技術が、ただの残虐で野蛮な殺戮（おとし）に貶められてしまったのだから。

## グローバル化の正体

これがグローバル化とよばれるものの正体なのだろうか。見たこともない外国の影響で小さな村の人びとは、先祖伝来の土地を失い、継承されてきた文化を失い、ばらばらになりかけている。首都に住む親戚たちが、変わっていく故郷を心配する気持ちは、実際に村を歩き人びとと話をすると、なおのこと切実に感じられた。

かつては診療所の無線しか連絡する方法がなかった村に、去年から携帯電話のアンテナが立った。村人はみなプリペイドの携帯電話を持ち、首都からの電話が受けられるようになった。「今ならいきなり白人がやって来ても大丈夫だ」。



チーフの子どもとして迎え入れられ、部屋を与えられた



そこには150人ほどの村人が、毎日魚を捕りながら薪で煮炊きをして暮らしている

首都と村は以前よりも頻繁に連絡を取りあっている。街から船がいつ来るかもすぐわかる。村に住む昔の友人もうれしそうに電話番号を教えしてくれた。「これさえあれば日本と話が出るよね」。

これまで電気がなかった村にも、ソーラパネルをもつ家がふえ、DVDを再生することもできるようになった。二〇一一年の日本の津波のニュースは即座に島にも伝わった。録画された映像を見て、島を離れ焼き畑農耕民が住むマライタ本島に移ることを決意した家族たちもいる。世界のどこかで起きた事件が島の人の生活に直接影響をあたえている。

村人たちは、イルカ漁が途絶えたことを残念がりながら、口々に言った。「でもこれで白人のやり方はよくわかった。イルカ漁は必ず復活させる。日本からも応援して欲しい」。

二〇年前は手紙がいちど往復するにも二カ月はかかった遠くのソロモンの村が、知らぬ間にこんなにも近くになっている。日本はもはや別世界ではない。互いの距離が近くなったことを喜ぶと同時に、かよわく小さな村が世界の荒波をたやすく受けてしまうようになったことが、やはり気にかかる。

情報が支配する時代には、もはや村と世界のあいだに防波堤はない。小さな村を守る方法も今のところ見つからない。「何かあつたらすぐに連絡しよう。お互いにね」そう言い合って短い滞在を終え、私は島を離れた。

## 世界を組み直すための海

そして二〇一三年一月二二日、早朝の四時。北九州の家で寝ていた私の携帯電話が鳴った。

電話はソロモンの村からだった。「イルカがとれた。九〇〇頭だ！」。

村人たちはイルカ漁を再開し、二年ぶりに捕まえた今年の初物は、歴史にのこる記録的な大群だった。九〇〇頭のイルカがとれたことも驚きだが、寒い日本の冬の早朝に布団にくるまっている今まさにこの瞬間に、太平洋の反対側で村人たちがイルカを追っているという現実には圧倒された。受話器を通じて興奮が伝わる。その日は一日、イルカがとれた時の村の光景がフラッシュバックし、私は一人研究室で高揚していた。

しかし翌日から、インターネット上にはまったく異なる物語が展開されはじめた。村でイルカがとれたニュースは、自然保護団体の手であったというまに世界じゅうに発信された。生きるための捕獲が、いつの間にかイルカを販売し輸出するためとすり替えられている。自然保護団体が支払ったお金は首都に住む反対勢力が握っているという根拠のない談話も書かれている。

首都に住み英語が読める村民たちはフェイスブックを使って反論する。しかしヴァーチヤルなネット上で世界じゅうの匿名の人びとから発せられる好き勝手な発言を止めるのは、たやすいことではない。二〇年前には、ソロモンのなかですらほとんど知られていなかった小さな村の名が、なんども書き立てられ世界じゅうから





海面上昇で土地を失い津波を恐れ、焼き畑農耕民が住むマライタ本島の沿岸部に移住する家族が増えてきた

名指して非難される。その責任の一端を私も担っている。

確かに海は世界につながっている。しかし、<sup>ぼうよう</sup>茫洋としたつかみ所がない広さと突如はげしく荒れる気まぐれな波の前に、むしろ謙虚に自分の無力さを認識するのが、もともと人間がもっていた外界へのリアリティだったはずだ。情報技術の発達によって、どんなに世界が狭くなっても、どうしても伝えられないことがある。化石燃料からつくられた電気を好きなかっかい、アームチェアに座って「いいね」のボタンをクリックするだけでは決して解らないことがある。

今でもその村は、小さな木造船で二四時間揺られたさきの辺境にあり、沈みそうな砂州の上にかろうじて家が立っている。そこには一五〇人ほどの人が、毎日魚を捕りながら薪で煮炊きをして暮らしている。その絶対的なリアリティ。世界のあり方を、そうしたリアリティからもう一度組み直すことはできないのだろうか。

## 特集 水を考える